シーサイド・バー

Gitan Ohtsuru

大鶴義丹

集英社

SEA SIDE・BAR

シーサイド・バー

シーサイド・バー

一九九四年二月一〇日　第一刷発行

著　者　大鶴義丹（おおつるぎたん）

発行者　若菜　正

発行所　株式会社　集英社

東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇

郵便番号　一〇一―五〇

電話　編集部（〇三）三二二三〇―六一〇〇

販売部（〇三）三二二三〇―六三九三

制作部（〇三）三二二三〇―六〇八〇

印刷所　大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1994　GYITAN OHTSURU, Printed in Japan

ISBN4-08-774053-6 C0093

目　次

シーサイド・バー　5

ウィークエンド・ドラッグ　133

装帧／明比朋三

装画／高橋常政

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

シーサイド・バー

初出誌

シーサイド・バー　「すばる」’92年7月号

ウィークエンド・ドラッグ　「すばる」’93年9月号

シーサイド・バー

聞こえるのは繰り返される呼吸、他には何も聞こえない。鼓膜まで入り込んでいる水は温かい。頬に張り付いている太陽はおもく、プールの底まで沈んでいきそうだ。息を止める。耳を澄ます。どこかの巨大なトンネルの中を何億トンもの水が流れている。そのトンネルはどこにあるのだろうと思い、恐怖した。真っ暗なトンネルの中で、後ろから濁流が迫ってくる。分かっていた。その怒号は体の中から聞こえている。再び恐ろしくなった。それは確実に体内に存在している。

彼はプールに一人浮かんでいる。顔に日差しをからませ浮いている。目を開けた。雲さえない空。そのまま宇宙が透けて見えそうだった。

「セイ！」

彼を呼ぶ声がプールの水を通して聞こえた。答えずに目を閉じた。

日差しはまぶたを貫き眼球を奥へと押しやる。脳に伝わり吐き気を誘った。

「ダメよ、寝たフリしたって、寝たままで浮かんでいられるものですか」

彼は静かにバタ足を始める。水の弾ける音を聞きながらプールサイドまで行き、目を開けると同時に一気に飛び上がる。軽い目まいが襲う。日差しが冷えた体を温める。

ママンを見た。彼女はプールの向こう側にボブとメアリーという名の二匹の犬と立っている。二匹は彼を見るや、弾け飛ぶようにプールサイドを走りだし、三秒フラットで彼に飛びついてきた。黒いボブは彼の顔まで飛び上がり、噛みつくように舌を躍らせる。白いメアリーはトランクスにかじりつく。彼は二匹の気がすむのを待ちながら、顔から足まで全てが唾液だらけになって相手をしてやった。

「昼間は確かに客は少ないけど、ちゃんと店にいてよ。それにここはホテルのプールなんだから、勝手に使っていると叱られるわ」

ママンが叫んでいた。

「大丈夫だよ、管理人と仲良くなったし、店だって犬たちが番してるさ。誰かが来れば呼びにくるし、泥棒には噛みついてくれるさ」

「だったら給料彼らに渡すわ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

彼はしぶしぶ二匹とプール沿いに、潮の匂いに向かって歩きはじめた。

浜にあるからという単純な理由で、店の名はＳＥＡＳＩＤＥ　ＢＡＲ。母の妹が旦那と経営している。店は専らその叔母がやっており、杉山正明という旦那の方はホテルでトランペットを吹いている。

彼はこの島に一ヵ月前にやって来た。島はその五分の一が軍のベースで、あとは海以外は何もない。赤道は近く、風は一定方向にだけ吹く貿易風。シーズンともなれば日本人の観光客で溢れ返り街は活気づくが、今は寂しい。本当に何も起こらない。波の音に時間だけが数えられる。

男、高橋セイ、十六歳。彼は二ヵ月前に東京の私立玉山学園を退学した。形こそは自主退学であったが、追い出されたも同然であった。入学して二ヵ月もたっていなかった。

学校をやめてから一ヵ月位はブラブラというか、それ以上に何もしていないという状態だった。友達ともほとんど遊ばなかった。昼に起きて、両親とも仕事に出てしまったあとの誰もいない大きな家で、冷えた朝飯をレンジで温める。テレビの昼ドラを見て、自転車で駅前の本屋に行き立ち読みをし、ゲームセンターへ行く。そのころに夕日が見え、やっ

と家に帰る気分になる。その繰り返しを黙々と続けていた。それしかなかった。その繰り返しを止めると、とたんに何処かに弾けとぶような気がしていた。

彼の両親は貿易会社を夫婦で経営していた。裕福なことは裕福な家庭だった。小学校から中学一年までは独りでロスの全寮制の学校で過ごし、中学一年の終わりに帰国した。帰国子女というやつだ。途中から編入した公立の中学では、英語を話せるということから珍しがられ、ちょっとした人気者だった。

いつものゲームセンターからの帰り道、彼は中学時代を思い出し、いつからこんな登校拒否児童の末路みたいな生活をしているのだろうと思った。別にいじめられっ子だったこともないし、クソ真面目だった訳でもなく、どちらかと言えば明るく目立っている部類の人間のはずだった。それが、同じように学校をやめてしまいプー太郎をしている悪友たちからの遊びの誘いにも応じず、何をするでもなくゴロゴロして、一体自分はどうなってしまったのかと……。新宿のディスコでナンパに明け暮れている悪友たちのほうがよっぽどまともだと思ったが、何故か遊ぶ気にもなれなかった。遊んだらそのまま遊び続けてしまいそうで怖かった。別に何があるというわけでなし、何が待っているというわけでもなしに、ただ意味もなく時間は過ぎていった。

先の見えない繰り返しは、終わりがない。ある時そう意識し始めた瞬間に苦痛が訪れた。まず、街を歩いていると、すれ違う人達が自分を見下しているように思え始めた。皆が彼の生活を批判しているような気がし、自然と家に閉じこもることが多くなった。一日中テレビを見るようになり、近所へ買い物に行くことさえ億劫になっていった。更には寝てばかりいるようになり、体重だけ増えていった。そんな自分を鏡に映すのは辛かった。叩き壊したくなるだけだった。

ある朝、鏡を二時間見詰め続けた後、ありったけの金二十五万を手に、成田空港行きの電車に飛び乗った。バッグの中には裸の札束とパスポートだけ。初夏の朝だった。

店のテラスに並ぶパラソルの下で犬たちと海を見ていた。風は頬から髪の毛一本ずつを丁寧に撫でていく。二匹の犬たちの体を覆う数億本の毛さえも、一本残らず撫でていく。丸いパラソルの影の外は真っ白。その先に海が見える。目をつぶる。ハエが何匹か顔に止まる。汗をなめているのだろう。瞼の裏に雲が流れている。見えないけれども、そのスピードだけは感じられた。

店への階段を誰かが昇ってきた。犬たちが二匹そろってあくびをした。

「暇そうだな。ママンは？」
彼は目を開けた。声で相手は分かっている。フィリピーノのジェイだ。
「今日は気持ちがいい日だよ」
「ここには今日も昨日もないよ、セイ。いつも、だけだ。俺はここに来てどれくらいたったのかさえ忘れているよ」
彼は立ち上がりパラソルの外に出た。重く白い世界に目が眩む。手探りで店のなかへ向かう。中は真っ暗で冷たい。
「ミュージックぐらいかけろよ。いつものやつだよ」
「余り好きじゃないんだよ、レゲエは」
「そのうち好きになるよ。さあ、とにかく頼むよ。しけた店が余計にしけちまう」
セイは仕方なしにカセットのスイッチを押し、ボリュームをゆっくりと上げた。リズムがゆっくりと溢れだす。
「これだよ」
ジェイは身体を左右に振り、踊りだした。セイは黙ってバドをカウンターに置く。琥珀色のボトルは霜が付きとても冷たそうだ。

「ジェイ、仕事の具合は？」
「そうそう、今度テクニカルアドバイザーになれたんだ。金も少し上がった」
「凄いじゃないか。大したもんだよ」
「ああ、だからこうやって少しなら仕事もさぼれるんだよ。ハハハ」
ジェイはホテルのコックをしている。彼は三年前フィリピンからこの島に集団就職してきた。趣味は日本人女のナンパ。夜ともなればいつも一緒に渡ってきた仲間とつるんで遊んでいる。彼らは口を揃えて日本の女はすぐにやらせてくれる、それもただで、やさしいと言う。
「もう少しで日本もサマーバケーション、女の子たちがやって来る。楽しみだ」
「そんなに日本の女はイイ？」
「イイよ。みんな可愛いし、臭くないし、スケベだし、文句無いよ」
「そんなにすぐやらせる？」
「イージーよ。シーズンなら大抵毎日できるよ。セイも日本では毎日していた？」
セイは冷蔵庫から冷えたミネラルを出し、口にした。味はない。冷たさだけが勢い良く広がっていく。

「そんな滅多にできるものじゃないさ、ここだって……」
「どうして」
「どうしてもこうしても、日本の女は、そんなのばかりじゃないさ」
彼は高校をやめる寸前に友達と行った新宿のナンパで有名なディスコを思い出した。GIラビットという店だった。
「現に俺は数えきれない程やってきたよ」
ジェイは少しむきになった。セイは答えずにミネラルをもう一口。すぐにその一口は汗になっていくのだろう。
「分かったよ。ジェイはナイスガイだよ」
セイがそう言うとジェイは再びいつもの笑顔を取り戻した。そんなジェイがセイは何となく好きだった。この島で唯一の友達と呼べる奴だと思った。
「セイ、今夜イルカを見にあの岬にボートを出してみようぜ」
「この間行ったけどいなかっただろ。あのボートは手こぎだから疲れるんだよ」
「大丈夫だって。ほら見てみろよ」
ジェイはそう言ってセイをガーデンへ引っ張っていった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com